

二十世紀粵語研究(1)
『香港粵語語法的研究』

竹越美奈子

早いもので、私が広東語の研究を始めて約 25 年になる。研究室には卒論執筆時から集めた広東語の研究書、教科書、辞書などがたくさん揃っており、それらは今では全て前世紀の粵語の貴重な資料である。筆者が早期粵語の研究を始めたときに資料の収集に苦労したように、これから研究を始める人にとっては絶版になっていたりして、入手困難かもしれない。以上のような動機で、今回より「二十世紀粵語研究」と題して私の研究室にある研究書、教科書、辞書のたぐいを紹介したい。

『香港粵語語法的研究』（張洪年、1972年）

著者：張洪年(Samuel CHEUNG)

出版社：香港中文大学

出版日：1972年10月初版、2007年増訂版

内容：著者の修士論文。香港粵語文法の網羅的な研究書

初版本のカバー折り返しには以下のように書かれている。

本書は香港中文大学大学院中国語文学部大学院生の張洪年君が 1970 年に完成した修士論文である。九章の構成は、(1) 語音、(2) 文の成分、(3) 文の類型、(4) 品詞、(5) 並列式、兼語式、連述式、(6) 述補構造、(7) 動詞接尾辞、(8) 助詞、(9) 外来語である。香港で流通している「広東語」(広州語)を、構造言語学派の理論にもとづいて、特に趙元任教授の『中国話的文法』を参考にして、著したものである。

しかしながら、実際に本文は(1) 語音、(2) 文の成分、(3) 述補構造、(4) 動詞接尾辞、(5) 助詞、(6) 外来語の六章しかない。その理由は 2007 年の増訂版で明らかになった。増訂版の序文に次のようにある。

『香港粵語語法的研究』初版は六章構成である。1972 年出版時の表紙裏には全九章と書かれている。なぜ三章少なくなったのか。私の修士論文は全六章で、これが後に出版された六章である。1969 年夏、論文が通ってまもなく、周先生(訳注：指導教官の周法高教授)は私にこの研究を続けるようにすすめて下さった。そこで趙先生(『中国話的研究』の著者である趙元任教授)の枠組みにしたがって三章を書き足した。見出しは(1) 並列式、兼語式、連述式、(2) 文の類型、(3) 品詞である。品詞の章はさらに二章に分かれる

ので、全四章である。出版するときには元の論文と後で書き足した部分を一緒に上梓する予定であった。しかし後に紙幅等々の都合で論文の部分だけが印刷された。私は書き足した四章を今日までとっておいた。この四章は資料が多くて分析が少ないので、参考になるだろう。今回全十章を一緒に印刷して発表することにした。(増補版序文 viii)

本書には大きく分けて二つの価値がある。一つ目は、科学的な理論に基づいた全面的な研究書であるという点である。それまで粵語の研究書とされたものは、十九世紀の宣教師などによる著作にしろ、二十世紀のダニエル・ジョーンズや趙元任の著作にしろ、粵語の教科書という体裁をとっていた。それは主に外国の言語学者が広東語という未知の言語を知りたいという欲求から研究したものである。読者として想定されたのも広東語を学ぶ非母語話者であった。それに比して、本書は香港とアメリカの大学で言語学を学んだ母語話者(張洪年氏自身は「自分は上海生まれで、幼少時から香港で育ったものの広東語の語感には自信がないので同級生などに確認した」と序文に書いているし、同趣向のことを語っているのを筆者も耳にしたことがあるが、これは同氏の学問に対する慎重で謙虚な姿勢を表わすものである)が、香港中文大学大学院に提出した修士論文である。想定される読者も広東語の研究者であり、その多くが母語話者であることは、これまでの研究と一線を画している。

もう一点は、張洪年氏自身も増補版の序文で述べているように、本書の例文自体が 1960 年代の香港粵語の資料であるという点である。初版の序文によれば、本書の例文は、放送局の放送劇から採取したもの、日常生活の口語、参考文献からの引用、著者の作例であり、著者自身は語感に自信がないため同級生に確認したそうである。本書は専門書でありながら、生き生きとした口語が多く収録されており、それが使用される場面や文脈についても詳細に説明が加えてある。その中には今日では使用されなくなったもの——形容詞の修飾の程度を強めるために重ね型の第一音節におこる高昇り変音(「紅*紅」とても赤い、*は高昇り変音)、動詞の完成体を表す高昇り変音(「食*飯」ご飯を食べた、現在の言い方は「食咗飯」)、肯定否定反覆型疑問文で後ろの動詞の目的語を省略すること(「食飯唔飯? ごはん食べますか? 現在の言い方は「食唔食飯?」)——もあるが(増補版序文 vii)、これも当時の言語状況を知る貴重な資料であるため、初版のまま残されている。

本書の初版が出版された 1972 年には余靄芹氏の *Studies in Yue Dialects: Phonology of Cantonese* も出版されている。『香港粵語語法的研究』と *Studies in Yue Dialects: Phonology of Cantonese* は共に、初めての全面的な粵語の研究書という点で双璧をなすものである。それが同じ年に出版されたというのも奇遇であるが、『香港粵語語法的研究』が現代香港粵語の共時的研究に焦点をしばっているのに対して、同年に出版された *Studies in Yue Dialects: Phonology of Cantonese* が粵語の下位方言や祖語にまで考察の対象を広げているという点で対照的であるのは興味深い。両書とも今なお粵語研究者必見の書である。